室蘭民報 2008年(平成20年)2月7日(木曜日)

資料館の在り方探る

11―14日「市民フォーラム」

研究者ら滞在 魅力発掘

伊達

地域に必要な資料館を考える市民フォーラム「地域を伝えること」（総合研究大学院大学主催）が十一日から四日間、伊達市館山町の市噴火湾文化研究所を主会場に開かれる。バスツアー、講演会などを予定しており広く参加を呼び掛けている。

同大で学ぶ元同研究所学芸員補の伊達元成さん（伊達市出身）らの熱意で実現。観光客向けにとどまらず市民のための将来的な資料館、博物館づくりに向け、教授や学生ら二十人が四日間伊達市に滞在し、市民とともに可能性を探る試み。

十一―十四日は連続でワークショップを開催。十一日は同研究所の大島直行所長、十二日は市の住んでみたいまちづくり課担当者、吉居大輔さんがそれぞれ講演。両日とも同研究所で午後一時―五時半に開催する。

市民フォーラム「地域を伝えること」のPRポスター

バスツアー 講演会…「多くの参加を」

特に参加を募っているのが十三日午前十時からの市内の魅力発見バスツアー。定員は二十人で開拓記念館、大雄寺、有珠善光寺などを巡るほか、参加者の発案で隠れた名所を探る趣向も用意。「研究者にぜひ地域の魅力を伝えてほしい」（同研究所）とアピール。

さらに十四日は同研究所で午前九時から、地域に必要な資料館づくりに向け、参加者と学生らがアイデアを出し合う予定。全日程参加無料で一日のみの来場も歓迎。

同研究所では「資料館に興味がある人だけでなく、観光のことや地域を売り出そうと考えている人に広く参加してもらいたい」とPR。問い合わせは噴火湾文化研究所（電話0142・21局5050番）へ。

理想の資料館像探る

学生、市民　熱っぽく意見交換

フォーラム開幕

学生と市民らが熱っぽく意見を出し合うワークショップ

伊達

地域に必要な資料館を考える市民フォーラム「地域を伝えること」（総合研究大学院大学主催）が十一日、伊達市噴火湾文化研究所を会場にスタートした。同研究所の大島直行所長らの講演をベースに、学生と市民らがワークショップで熱っぽく意見を出し合い、地域の魅力や理想的な資料館像を探っている。

四日間の日程で市民とともに学生たちが地域の資料館づくりを考える同フォーラムは、同大で学ぶ元同研究所学芸員補の伊達元成さん（伊達市出身）らの熱意で実現。学生ら十六人が訪れ、初日は十八人が参加した。

同研究所の大島直行所長は、文化財行政をテーマに講演。「学芸員、専門職員のステータスが行政、市民、企業で確立できなければ、高い理念や知識を持っていても立ちゆかない」と自身の経験を基に指摘。文化財、芸術文化と行政が一本化されていない現状には「縦割りではなく総合文化行政が必要」と説いた。

ワークショップでは参加者がマチの魅力を掘り下げ、歴史による文化の豊かさ、土地と人、生活の結び付きを語り、「記憶の中の博物館」についてはそれぞれ経験談などを出し合い、「そこで出会い、活動する人こそが資源」と結論づけた。

十二日は「移住」をテーマに市住んでみたいまちづくり課の中澤篤さん、移住コンシェルジュの吉居大輔さんが講演。初日同様ワークショップも盛況だった。企画者の伊達さんは「研究成果を学内だけでなく地域に還元するコンセプトで開催した。個人や団体の考え方の指針となるミッションステートメントを重視し、地域の資料館を探りたい」と意欲的だ。

2008.2.15 民報

「歴史育てる博物館に」

市民、学生がまとめ

伊達

資料館を考える市民フォーラム「地域に伝える」と」（総合研究大学院大学主催）が十四日、最終日を迎え、伊達市噴火湾文化研究所でまとめのワークショップが行われた。

四日間の日程で市民とともに学生たちが地域の博物館づくりを考える同フォーラム。十一、十二日に文化財行政、移住をテーマにした講演とワークショップ、十三日は有珠善光寺、開拓記念館、大雄寺など市内八カ所を巡るバスツアーを通し、地域の魅力や文化についての意見交換も熱を帯び、最終日を迎えた。

個人や団体の考え方の指針を定めるミッションステートメントを基礎にした資料館、博物館づくりに向け、学生と参加した十人余りの市民がグループごとに意見を出し合った。これまでの議論をまとめながら、「ヒトが命の博物館」「歴史を育てる博物館」など、各グループで結論をまとめた。

今回の企画運営に当たった同大の伊達元成さん（元同研究所学芸員補）は「市民のみなさんと学生がともに考える作業ができた。今回の結論は一つの通過点で、市民のための博物館づくりに向けたふれない方向性の基礎として生かしてもらいたい」と期待を込めた。

市民のためにある博物館、資料館づくりへ意見を出し合う学生と参加者